

樗牛とニーチェ(1)

中村憲治

Chogyu und Nietzsche

Kenji Nakamura

序

この試論は、樗牛の伝記的な側面を追いながら、そこにニーチェに通ずるものをみて行こうというものである。樗牛がニーチェを知ったのは、明治三十一年一月に井上哲次郎（ドイツに留学し、従来の英仏哲学に対してドイツ系哲学を移植、また日本主義を唱導した人として知られている。）の講演をきいてからだ¹という。また明治三十四年九月の「帝国文学」誌に、樗牛の友人登張竹風によって「高山君の『美的生活論』は明らかに、ニイチェの説にその根柢を有す」という論評が載り、それ以降それが定説のごとくいわれてきた。だが樗牛自身その「美的生活を論ず」（明治34. 8）を発表した年の十一月十五日附の姉崎嘲風宛書簡の中で「……吾れは又ニイチェの思想に先天の契合あるを覚えぬるは如何にぞや。……」と書いてい

るのである。樗牛がニーチェを知った後、ニーチェから多くのものを得たであろうことは想像に難くない。またそれを考察して行くことは、日本において最も早い時期にニーチェ主義者、或はニーチェ紹介者といわれた樗牛を研究する上で重要なことである。だが樗牛自身のいう先天の契合を無視することはできないだろう。その両方をみて行かなかったなら、片手落ちとなろう。人々は或る思想に出会うと、そこからそれぞれが感銘を受けたもの、衝撃を受けたものを取り出して、自らの内部でふくらませていく。従ってその思想が偉大であればある程、より多くの解釈も生まれてくるし、より多くの思想が派生してくるのである。かように、人それぞれによってその思想を受けとめる仕方が様々になる大きな要因の一つに、先天の契合が考えられるであろう。それを探っていくことは、無意味なことではない。そういうわけで、私の考察は樗牛の誕生から始まるのだが、どれほどその「先天の契合」に触れることができるか、はなはだ心もとない次第ではある。

第一部 誕生より二高卒業迄

誕生 高山樗牛（本名＝林次郎）は、明治四年（1871）一月十四日鶴岡の高畑町に、斎藤親信、芳子の二男として産まれた。翌五年二月十七日、戸籍上高山久平、岩江の養子となる。樗牛が高山家の養子になることは、誕生前から決っていた。親信は高山家から養子にきた人であり、その実兄久平には子がなかったので、男女を問わず第三子を養子にするという約束になっていたのである。その第三子が男児であったので、両家の喜びは大変なものだったらしい。生後一ケ年は樗牛を乳母に背負わせてほとんど毎日新士町（現在大東町）の養家に通わせ、早く養父母になじませようとしたりしている。なお樗牛生誕の部屋は、現在も市役所本庁舎と道

路をはさんだ真向いにある致道館（徂徠学を藩学とした藩校）に保存されている。生家そのものは、斎藤家の現在の戸主求氏（独立会所属の画家）が処分して東京に転居したため、現在は諏訪家の所有となっている。養家の現在の戸主は、樗牛没後三浦家より高山家に養子にきた喜三郎と樗牛の末の妹直井との間に生まれた久太郎氏であり、家はほぼ昔のまま維持されている。そこには、樗牛の蔵書、直筆の絵等、遺品の数々が不完全ながら大切に保管されている。樗牛には他に兄弟姉妹八人がいた。樗牛が最も可愛がった弟良太は三男で、結核の為二十二才で没しており、四男信策は、後の斎藤野の人である。末弟親平は銀行家になった人だが、文学好きで、ハーンの翻訳や、樗牛伝なども書いている。また、樗牛の蔵書及び書簡等の資料類もかなり所蔵していたとのことだが、残念ながら現在親平の長男勁氏のもとにはそれらは残っていない。ついでながら親平の妻良子は、佐藤紅緑の姪である。

ここで樗牛の生家、養家について簡単に触れておきたい。信策の「亡兄高山樗牛²」によると、「高山家は予の斎藤家と共に士族ではあったが極く低い階級で、本当の武士などと銘打つわけには行かなかった。斎藤家は古来普通の人々のみであったのに引き替へて、高山家は代々芸術に長けて居て、祖先の中のある者は道場を有した位である。固より身分は卑しかったが確かに技能才幹は凡人以上であった。……之に反して斎藤式は蒲柳の質である。高山家は唯に武芸に長けたのみでなく、低い階級の士族としては似合わぬ程に学問にも長じて居た。……それから不思議なのは書画の才を持った者が古来多いことである。……こんな風に高山家の血統を引いたものには小才ではあるが、本当に百人並みの才幹を持った者が多かったので、つまり樗牛はこれ等の高山式の小才幹を一身に煥発したのである。しかしこの高山式は決して羨むべきものでは無いのである。即ち才人もあった代りに気違いも偶々出たとの事である。精神病者もあれば自殺者もあったらし

い。……」と書かれている。武芸に長けた者としては、三百五十年位前に高山八衛門という人が三十三間道の通し矢で、七千六百十六本中、五千百九十七本を当て、当時の最高記録を達成して弓の日本一となり、荘内の名を高めたと、高山家所蔵の古文書にある。また養父久平も柔術や礼法など五・六の免状を持ち、門弟もかかえていたそうである。また、書画については、樗牛の大伯父に上野柳齋という人があり、画家として暮した。この画才については、現在樗牛の甥である斎藤求氏が画家として一家を成しているところをみると、いまだに脈々と生きていけるといえるだろう。樗牛自身は、当時としては、体格に於ては優れていたし、七分の強弓をひくほどの体力もあった。また絵も仲々上手（高山家には樗牛直筆の絵が保管されている）であった。だが信策によれば、書は兄親廣に比べればお話しにならぬ位拙だったそうである。書に無知な私が、鶴岡の高山家や、樗牛の墓のある清水の龍華寺で見た樗牛の字は、仲々達筆に思えたが、そういうものではないらしい。

実父親信は後に鶴岡郊外の大宝寺村の村長となり、茶の栽培などもし、実家の斎藤家は結構ゆとりのある生活をしていたらしい。一方養父久平は、小官吏として任地を転々とし（これに関しては、小野寺凡氏の「人間高山樗牛」³に詳しい）、最後は東京の警視庁勤務で終っている。警視庁での地位は、当時の「官報」附録の『職員録』（ある地位以下は記載されていない）に記載されていないので（養父と同様警視庁に勤務していた実兄斎藤親廣は明治二十年、二十一年両版に「九等・書記局」、二十二年版には「八等・書記局・第三局」とある。）かなり低かったらしい。従って、生活も決して楽ではなかったようである。しかし樗牛は、こうした生家と養家に見守られて、養子であることも知らずに、負い目を感じることもなく、後に一般に東北人タイプと見られやすい、陰気さや寡黙さとは縁遠い、陽気で傲慢な樗牛が東北人であることを知った上田敏が、その意外さに驚いた程に、

のびのびと、我が儘一杯にふるまい、成長して行くのである。

小学校時代 明治十年七月、就学年齢に達する以前から「入りたい」と言って養父母を困らせていた学校に樗牛は念願になって入学する。そして十月には養父久平の転任に従い、山形の香澄学校に転校する。転校に際して本鏡学校(鶴岡)の教師は「大切の生徒が連れて行かれる」⁴と嘆いたという。秋山正香氏の(「高山樗牛——その生涯と思想」)によると、樗牛が「はじめて自分が高山家の養子であり、斎藤の叔父が実は生みの親であることを知ったらしい。」⁵のは明治二十一年頃、即ち第二高等中学校時代のことと想像されているが、末弟親平の「樗牛伝」によれば、山形移住後、戸籍調べにやって来た巡査と養母とのやりとりを蔭で聴いていて知ったとある。とすれば、巡査が戸籍調べにやって来るのは、恐らく移転後間もなくのことであろうから、六才か、七才頃のことであろう。樗牛がこの事実をどのように受けとめたのか、子供のことであってみればなおのこと想像し難い。だが少なくとも、その後の樗牛の成長の跡を辿ってみると、お定まりの暗い影は、落さなかったように思われる。寧ろ後年の樗牛の弟妹思いをみると、独っ子と思いつ込んでいた自分に、実は八人もの実の兄弟姉妹がいたことを喜んでいるかのようである。だが後年樗牛は、嫁いだ妹にこんなことも言っている。「決して養子になるものじゃない。お前小供を沢山有っても決して養子にはやるものじゃないよ」⁶人知れず樗牛の心の奥には蔭が落ちていたのかも知れない。或は親平のいうように、樗牛にとっては「晴天の霹靂」であったのかも知れない。

さて、小学校時代の樗牛は、成績は常に一等か二等を通し、酒田琢成学校時代には、北海道、東北巡幸途上の明治天皇の前で、「奉祝巡幸」を読みあげる程の優等生であったが、半面相当な腕白であったらしい。山形時代、樗牛の家の近所に海上胤平(歌人として一家をなし、東京に歌塾「椎木吟社」を設け、門下生千人を数えた人として知られている。)が住んでいたが、

その海上家の犬が何者かによって切りつけられ、傷を負わされた。海上はこの界限でこんなことをするのは高山の息子以外にはいないといって、高山家に談じ込んだ。養父は平身低頭し、泣きながら身に覚えのない罪の弁明につとめた樗牛は、結局濡れ衣を着せられたまま、謝罪させられた、という。だが実はこの事件の真犯人は、小学校時代からの顔見知りであり、二高、帝大を通じての友人である、後の一高教授畔柳都太郎と、その友人であったということを、二高時代、畔柳のうちあけ話によって樗牛は知るのである。この濡れ衣事件は、当時の樗牛の腕白ぶりを知る上では恰好のエピソードであろう。

腕白ぶり同様樗牛は勉強でも目立っていた。当時の同級生三浦菊太郎によれば、画がとても上手で、また作文の力は入学当時はそれ程目立たなかったが、後に「日一日と此長所が明になった」⁷という。当時「記事論説文例」というかなり厚い四冊物の書が青年の間にはやっていて、それを樗牛はどこかから借りてきて、筆写して二冊物に綴り、飽かず読み耽っていたという。後年の樗牛の文才は、この頃から養われていたのであろう。遊びにおいても、腕白ぶりにおいても、諸々の勉強や体操においても、抜きんでいた樗牛ではあったが、ただひとつ、算数だけは不得意で「先づ普通以上」⁸でしかなかった。そして風邪をひくとよく咳をして、時には痰に混って血が出るがあったという。この頃既に、後年樗牛の生命を奪うことになる病魔が巢食っていたのかも知れない。これは、ニーチェが少年時代数学が苦手だったこと、そしてその晩年に致るまで悩まされる激しい頭痛と視覚障害に既に苦しむことがあった⁹ことと、似ていなくもない。ただニーチェは、学業が優秀であることや、絵が上手だった、というところは樗牛と似ているが、級友に「小さなお坊さん」¹⁰と言われる様な、風変わりな、行儀の良い子だったそうで、腕白で行儀の悪い¹¹樗牛とは好対照ではある。

中学校時代 明治十七年九月、樗牛は福島中学校に入学する。そしてこの頃から樗牛は、単なるガキ大将的な存在から徐々に脱け出そうとする。雑誌に投稿したり、肉筆の週刊個人新聞を学校内で発刊したりしている。そしてかなりの書籍を濫読した。近野衛門治の「樗牛伝」(『人文』大正6. 4)によると、唐宋の大家遺文は勿論のこと、漢楚、呉越などの軍談類、三国誌、水滸伝、源平盛衰記、保元平治物語、太平記、そして一九、三馬、京伝、種彦、春水等の戯作、そして特に馬琴の著書は、小品文に至るまで余さず読んだという。しかし西鶴のものは読んでいなかったという。後年の樗牛の西鶴ざらいが既に始まっていたのかも知れない。現在読むことができる「光陰誌行」は、この頃の樗牛の日記である。学業成績は殆ど首席を通したようであるが、樗牛は決してガリ勉型ではなかった。むしろ、それを軽蔑し、それらしい生徒の勉強をわざと邪魔したりした。当時の同級生で終生樗牛を尊敬してやまなかった近野衛門治のノートに樗牛は、一字も読めなくなる程の悪戯書きをし、「雑記帳一冊と学生の生命とは果敢なき友よ、頭脳の本ブックに記述したらんには、火にも焼かれず、遺失もせず、まして予の楽書もなし得ざりしものを」¹²などと言ったという。しかもこの言葉に被害者の近野がいたく感動したというのだから、面白い。また樗牛は、養父久平が礼儀作法に厳しかったにも拘らず、一步外に出ると、飯粒を口一杯にほうばったまま、放言高論し、「飯粒を四方に吹き散らし」¹³他人の菜を奪ったりして、随分回りに迷惑をかけたらしい。明治十八年の新校舎落成式に、生徒総代に選ばれ、祝辞を朗読した程の優等生でありながら、この腕白ぶりである。天衣無縫の英雄の如く近野ら同級生達の眼には映ったのかも知れない。また養父久平が芝居好きだったこともあり、樗牛は幼い頃よりよく芝居を観た。観劇した夜は帰宅が午前零時をすぎるとは普通で、翌日は授業に遅刻する。そうでない日もよく遅刻したという。また体操の授業などは始終休んでいた。とても模範的な生徒とはいえない。

中学校時代の樗牛は、自由気儘、人を人とも思わぬ才気走ったガキ大将だったようである。そして、恐らくあまり余裕のなかった養父母も、樗牛に級友に「潤沢」と思われるほど本を買い与えたらしい。この頃樗牛が眼を通した書物はかなりの量である。そしてこの頃樗牛は、処女小説『春日芳草之夢』を書いた。これを樗牛は、中学教師の榎本弁吉に読んで貰ったり、級友の中桐確太郎（後の早大教授）に筆写させたりしている。なおこの小説の直筆原稿の所在は不明であり、我々が現在読むことができるのは、この時の中桐が筆写したものであるとのことである。¹⁴従って、続編があったのかどうかも明らかではない。また内容に関しては、「人生五十は素より蜉蝣旦夕の生涯、生の目的は快樂にあるのみ、後生万鈞の重名は生前一杯の酒に如かず」という序章「夢見草」の言葉に注目するにとどめたい。ここには後年の樗牛の著作に通ずるものがあるからである。それについては、後に触れることになるので、ここでは言及しないことにする。

ところで、当時の中学生達の間には、高等中学校に入学するためには東京に出て勉強するのが最善であるという空気があった。いわゆる「鹿鳴館時代」といわれていた当時、移植される西洋文明に刺激を受けつつ、予備校で勉強する「上京遊学」は特に地方出身者にとっては、大変晴れがましいことであつたらしい。多くの中学生達が「上京遊学」に憧れを抱いた。そして樗牛の友人達も幾人かが上京した。樗牛が上京の夢を果したのは、明治十九年十月三日、養父久平が警視庁勤務となり、その転任に従ってのことであつた。翌十一月中旬、一高入学の為の予備校的存在だった東京英語学校（後の日本学園）に入学した。（当時は高等中学校の入学資格に中学卒業証書は必ずしも必要になつたらしい。多くの者が中学を途中退学し、上京遊学した後高等中学校に進んでいる。勿論樗牛もその一人である。樗牛の場合、中学校に二年間しか在学していない。）明治二十年七月の一高入学試験に樗牛は失敗した。この時の屈辱感、挫折感は相当なものだったに違

いない。そして樗牛は、十二月の二高補欠試験を受ける。これには合格するにはしたが、数学(殊に代数)が出来なかったために、本入学ではなく、仮入学だった(翌年の学年試験に二番で及第し、本入学生となる。)。これにも樗牛はかなり参ったようである。この時の仮入学組に、後の蔵相井上準之助がいた。¹⁵

二高時代 二高時代の樗牛には、学校の施設や教員への不満、「仙台」の風土的なものへの不満等、多くの不満があったようである。その多くの不満の一つに、学の内外を問わずキリスト教の信者が多く、執拗に入信を勧められることが挙げられている。中でも福島中学以来の同級生関屋祐之助に入信を勧められて、ひどく迷惑したらしい。その父に仙台在住の保証人になってもらっていたので、むげに断れない立場にあったことが災いしたらしい。樗牛のキリスト教嫌いは、こんなところにその端を発しているのかも知れない。

ここで二高時代の樗牛の文学的活動に触れる前に、ジャーナリスト的な樗牛の一面に言及しておきたい。樗牛が小学校に入学する年の二月(明治十年)に西南戦争が起っている。荘内の人々の西郷びいきは有名であるし、現在でも鶴岡と鹿児島は姉妹都市となっている。酒田には西郷神社や西郷会館まである位である。荘内藩は幕府側だったのになぜ、と首を傾げたくなるが、実は奥州列藩の中で最後まで政府軍に抵抗した荘内藩に対する西郷の処分が、なぜか例外的に軽かったということに、その因があるのである。以来荘内人は西郷を大の恩人と思うわけである。当然西南戦争に際して明治政府は、荘内藩士の動向に警戒の眼を光らせているし、実際に不穏な動きもあったようである。そうした世情に、六才の児童であったとはいえ、好奇心旺盛な樗牛が全く無関心でいられるはずはない。おまけに養父久平は、末端官吏とはいえ、西郷人脈に属する三島通庸の任地に常に従った人である。土地柄といい、家庭といい、道具は揃っている。樗牛は子供

なりに自由民権運動などにも興味を示したらしく、明治十五年には、県議会を時々傍聴したりしている。¹⁶そして中学入学後、終生の友人となる近野衛門治と知り合うわけだが、その父元右衛門は、六期連続県会議員をつとめた人であり、県会副議長もつとめている。樗牛はしばしば近野家を訪れ、元右衛門とも面識を持つ。こうして自然に樗牛の内に政治への感心は強くなって行くのである。そして二高時代、「擬国会」なるものが開かれている。この時の討論の課題は「豊臣秀吉の征韓は我国と利ありや否や」であり、樗牛は論客として参加したらしい。(政府委員として井上準之助の名があるのは、彼の後の姿を想像させて面白い。)太田資順編『樗牛兄弟』(大正四年六月、有朋館刊)によると、樗牛は雄弁家というよりは討論家で、完膚なきまでに相手をやっつけないと気が済まず、時には人身攻撃までして終には喧嘩になってしまうことも少なくなかったという。そして、そうした場をとりもつのがいつも後の蔵相井上の役目だったという。樗牛と井上の資質の違いがよく出ている。後に本物の政治家になる井上とは違って、樗牛はその都度思いのたけを放言するだけであり、政治家向きではない。だが、中学時代に書いた「春日芳草之夢」の中で女権論をとりあげている位だから感心は強かったとみるべきだろう。後の「日本主義」に関する作品もこれと無関係ではあるまい。だが後の樗牛は文芸評論家ではあっても、決して政治評論家ではない。それは二高時代も勿論例外ではない。ただ文芸だけではなく、現に行われつつある政治にも眼を向けているのであり、そうしたところが樗牛のジャーナリスト的な一面なのである。樗牛は様々なものに感心を示す。それが「美術についての彼の熱意がもし一本であれば」¹⁷という後人の感慨にもなるわけだが、それがジャーナリスト的な文芸評論家樗牛の樗牛らしいところだ、と思うしかないだろう。

樗牛像をより鮮明にするためにここで樗牛の二高時代の生活面にも少し触れておきたい。明治二十三年一月樗牛は徴兵猶予願(当時、官立学校、

府県立諸学校在学中の生徒には、願いにより、二十六歳まで徴兵猶予の特典があった。また、函館など一部を除く北海道や沖縄、小笠原諸島に籍を持つものは、徴兵の義務を免除されていた。) ¹⁸を提出した。その直後にほんのひと握りでしかない官立学校生徒にも無差別平等に兵役の義務を課するのは、おかしいという意味の手紙を樗牛は実父に出している。自分はエリートだという自負があったようである。前途ある学究の徒に力役を課するのは納得できないというわけである。結局樗牛は二十六歳になっても兵役の義務を果さなかった。籍を当時北海道にいた実兄の所に移したのである。このような樗牛の姿勢は、実は、後の日本主義や、それに関する作品の中にも現れているのである。これに関しては拙稿の「第二部」でより詳しく触れることになるが、要するに樗牛が、国家と個人とを比重にかけたとき、より重いのは、個人なのである。その意味で、高須芳次郎等が、ファシスト的文学論の好題目として樗牛を論じたのは、樗牛の個人主義的な側面を全く無視した筋違いの論考といえるだろう。樗牛の個人主義的な意識が明確になってくるのは、帝大入学以降であるが、既に二高時代のこの猶予額の提出という出来事に、その意識が現れていると思われる。「個人を離れて別に国家無し」¹⁹と樗牛は後に主張するのである。

生活面でもう一つ言及しておきたいことは、金銭的なことである。高等中学校の生徒の多くが、勉学途中でやめていった。その理由の大半は、経済的な理由だった。樗牛にもその危機があった。明治二十三年、養父が非職になったのである。ただでさえ楽ではなかった養家の経済状態が、更に悪化するであろうことは眼に見えていた。それ以前から養家の経済状態を気に懸け、大学卒業迄の学資を計算して養父に書き送ったりしていた樗牛であるから、その落胆と心配は並々ならぬものであったろう。「山形日報」に盛んに掲載していたのは、原稿料を学費の一助にしようという考えもあったからなのである。²²だがこの危機を樗牛は、養父と実父、そして嫁いだ実姉の援助で、

なんとか乗り越えるのである。そして樗牛は、金のありがた味を身にしみて知るのである。後年の樗牛は、日常的な意味では普通の生活者であった。それは、この様な金銭的な苦勞を経験したからであろう。後世の太宰治や坂口安吾のような、日常的な意味での生活失格者タイプからは樗牛は程遠い。その樗牛が「近代の批評家のなかでは空前絶後の人気を持った」²¹のだから面白い。

次に二高時代の樗牛の文学的な面に視点を変えてみよう。二高入学後の明治二十一年九月頃に山形県共同会を組織し、年末頃に「山形県共同会雑誌」第一号を発行、翌二十二年第二号に「ジャン・ダーク伝」を、「ペスタロッチー伝」を第三号に、そして翌二十三年第四号には「チャーサー伝」及び「宮城集治監を見るの記」を発表（ここで初めて樗牛——莊子逍遙遊にある言葉を採ったもので、曲りくねった樗の大樹や、垂天の雲のやうな鰲牛は、鼠も捕ることのできない存在で、そのため害される憂いもなく困苦することもないという意味²²——の号を使用したらしい）する。十月頃には「山形日報」に畔柳、渡辺らと羽陽文壇(文芸欄)なるものを創設し、投稿を始める。この間、二十一年に設立された二高の備教師米人ドクトル・ハーレルを中心とした「英語会」に参加し、英語劇「シーザー」のブルータスを演じたり、やはりハーレルが指導した「ベースボールクラブ」に参加して大いに活躍したりして、相変らずの多芸ぶりをみせている。中学時代同様二高時代においても、見識がさがるという理由で体操嫌いだった樗牛にとって、ベースボールだけは別だったらしく「山形県共同会雑誌」第三号(明治二十二・六)の「雑報」に紹介記事を載せている。ひょっとすると、今や国民的スポーツとなった野球の、我が国における最初のプレーヤーによる紹介文かも知れないので、参考までに引用しておこう。「○ベースボール 吾人は就中ベースボールを以て最良最善の運動なることを確認して疑はざるなり何となればベースボールは吾人に与ふるに愉快と健康とを以

てし少しも危険の虞なく最も経済的にして且最も普通的なる者なればなり蓋しベースボールは這般利益を吾人に与ふると共に同時に精神的の利益を与ふる者にして之れ諸般の遊技中最も高尚優等なる所以なりとす」現代の野球ファンが聞いたらどう思うだろうか。樗牛は後に二高教授として赴任するが、野球部に大歓迎され、部長に推されている。²³

明治二十四年、生徒、教職員有志によって文学会が結成され（勿論樗牛も委員として参加した）、六月に「文学会雑誌」が創刊された。そこに樗牛は「文学会漫評」を載せた。そこで樗牛は、詩の本質と、批評について言及している。仲々興味深い内容なので紹介しよう。「世に自ら詩文家と称する者あり、其の言ふ所を聞くに、曰く、文体は斯くせざるべからず、曰く、文字は斯く用ひざるべからず、曰く、某の文は語格を誤れり、曰く、某の句は『テニヲハ』を破れりと。吁、文体何物ぞ、語格何物ぞ、文学の極致は天地人情の靈想を發揮するにあり。靈想の本源を棄てて、章句の末流に走らば、議論愈々巧にして、本を去る愈々遠からん。」小学時代から「記事論説文例」などで文章研究に余念のなかつた樗牛が、詩の本質は文章にあるのではなく、天地人情の靈想にあるといっている。これは創作の本質論ともいうべきものであろう。即ち、いかに美文を用いようと、中味がなければ、詩とはいえない、ということである。当然の主張といえるだろう。だが樗牛の主張はここで終ってはいない。別のところでは「世人動もすれば曰く、詩は以て学ぶ可からず、小説は以て習ふべからずと。是れ大に然り、然れども内学問なくんば、区々たる曲巧小才又何をか為し得ん。」学問があつて初めて識見があり、識見があつて初めてすぐれた創作が出来るというわけである。更に樗牛は靈想と学問との相関関係をもみているのである。これはニーチェが論理や言語に否定的でありながら、それなしには人間の表現が成り立たないという認識を持っていたことに、通ずるように思われる。だが遙かに楽天的であり、浅薄ではある。「道化にすぎぬ！詩人に

すぎぬ！」²⁴という「ディオニュソス頌歌」におけるニーチェの心底からは、樗牛は程遠い。だがそれなりの視野の広さは持っているし、なによりも詩の根源に眼を向けつつ、詩作そのものをも見据えているところは、つまり一面的ではなく二面的にみているところは、評価できるだろう。この様に物事を二面的に、裏と表から論ずるというのは、ニーチェもよく用いる手法である。次に樗牛は批評について「詩人は能く美妙を直覚するも、之を理解する者に非ず、之を理解する者は即ち批評家なり。詩人は直接に自然を感銘し、能く其の微妙を知得するを得るも、自らは其の如何にして微妙なるやを知らず、之を説明する者は批評家なり。若し夫れ詩人の託興高遠寄情深幽にして、常人の理解する能はざる者に至ては其妙を悟り其理を識るを得るは一に批評家の之を分析解説するに依らずんばあらず。」その作品の素晴らしさを解説し、広く世の人に知らしむるのが、批評家だといっているのである。決して破壊的な批評、即ち、欠点を揚げつらうような批評は、批評家の本分ではないといっているのである。後の樗牛は鷗外に論争を挑んだり、辣かつな、即ち破壊的な批評を展開することが多かったようであるが、樗牛の批評の原点は実にここにあったのである。この「文学会雑誌」がこの後の二高時代の樗牛の主なる発表の場となることはいうまでもない。また文学会活動のひとつと思われるものに「能弁会」というのがあった。そこで樗牛は、度々演説している。その題目をいくつか挙げると、「利己主義の可否」(明治25. 5. 24)、「哲学と英文学」(明25. 10. 24)、「近世哲学に於ける進化論」(明26. 1. 23)、「基督教信者は多く迷信者に非る乎」(明26. 3. 25)²⁵等である。残念ながら、今となってはその内容は分からないが、樗牛が当時どんなことに興味を抱いたかが伺えて面白い。また、文学活動とは、直接の関係はないが、樗牛は二高時代に恋らしきものをしたらしい。明治二十五年四月三十日に樗牛は永見裕方に下宿するが、相手はその永見の令嬢みち子(後の岡不崩夫人)である。みち子は西周夫

人の姪に当たる。当時みち子は宮城女学校本科四年に在学中だった。永見家には樗牛の他に、藤井健治郎と、島貫彦次郎が下宿していた。みち子は樗牛に勉強に限らず、母校の文学会雑誌「宮城野」に載せる文章をみてもらったり、色々なことを教えてもらっていた。そしていつも長話になったという。樗牛の卒業後は藤井に勉強をみてもらったが、用事が済むと、すぐ自分の部屋に帰ったそうである。また、藤井や島貫には、母親か女中が部屋に食事を運んだが、樗牛の部屋にはみち子が運んだ。また同宿人三人が庭先の「鉄棒」で器械体操をしていると、それを見にきたみち子は、樗牛がうまくやると拍手をし、失敗するともう一度するようにと応援した。だが他の二人がうまくやっても、一度も拍手しなかったという。²⁶なんとなく淡い恋心が感じられる。しかし、樗牛の卒業の前月には、みち子の結婚話がまどまっていた。時代が時代であり、しかも相手はすでに画家として一定の評価を得ている人である。樗牛は恐らく、何もいえなかっただろう。だが二人は、みち子の結婚後も手紙のやりとりを続けるのである。土井晩翠は、「わが袖の記」(明治30. 6)「清見寺の鐘声」(明34. 6)「思出の記」(同)のヒロインがみち子であると指摘している²⁷が、それは十分ありうることである。そしてそれは悲恋で終わったからこそ、なのかも知れない。話が少し横路にそれた。ここで話を樗牛の文学活動に戻そう。

中学時代既に樗牛は「春日芳草之夢」や「光陰誌行」を書いているが、それはまだ海の者とも山の者とも知れない早熟な少年の文学的な資質の発芽にすぎない。その資質が、いよいよ根を張り、枝葉を伸ばし始めるのは二高時代である。そしてその樗牛が文壇に初めて注目されたのは、「早稲田文学」に投稿した「文学者の信仰」が、明治二十五年五月三十日刊の「早稲田文学」(第十六号)に、全文登載された時である。内容は、当時の文学者には様々な弱点があるが、その最大のもの「信仰」を持たないことであると、その「信仰」を文学者たちに求めたものである。この「信仰」と

は、宗教的なそれではなく、「自家立心の脚地」のことである。樗牛は半年後の「文学会雑誌」第三号（明25. 12）に発表した「厭世論」でも、厭世主義をこの「信仰」を持ち得なかったものの陥らざるを得なかった窮地にほかならないとしているし、評論の処女作ともいえる「文学会雑誌」創刊号（明24. 6）の「文学及び人生」では、人は地上の生活者たらざるを得ず、同情同感（自己の心情を移して他物を忖度すること）の靈性をもってこの世界と理想（最も高尚なる理想とは、心塵寰を脱して自然と同化し、「真」「善」「美」を正当に理解すること）界を連結させ、吾人の幸福をして円満完了ならしむる、のが文学者の役割だとしている。そして「文学者の信仰」ではそれをワーズワースの「信仰」に見い出している。樗牛はワーズワースをバイロンとの対比で次のように評す。「バイロンは其天を仰て其地を見ず失意不平の極只不可思議中に無益に平和を求めたりウォルツウオースは能く天上の星を眺むれども然れども地上の草を忘れず前者の天を見るや凄湍たり後者の星を眺むるや莞爾たり其地を見るや前者は憎悪と嘲笑とを以てし後者は愛情と親睦とを以てす前者は寂寞を楽しむを知りて而も社会を悪むを忘れず後者は等しく之を愛す前者の言は村政の劍の如く一度発すれば血を見ずんば已まず後者の歌は「エオリアン」の琴の如く如何なる風も之に触るれば妙音を発す」両者の違いは天上、地上を隔てなく見つめていこうとする「信仰」が有るか無いかはその由があるといいたいのである。また「ウェリテリズム」から抜け出たゲーテと比べてバイロンは、本質的にそこから抜け出していない厭世家だという。「バイロンたらざるも寧ろ小ウォルツォースたれ」「小ゲーテたれ」と樗牛はいう。この頃の樗牛のバイロンに対する評価は後年のそれとは比較にならない位に低い。この樗牛の主張は、ニーチェの「ツァラトウストラの序説」の「大地に忠実であれ、そして地上を超えた希望などを説く者に信用を置くな、と。かれらは、みずからそれと知ろうが知るまいが、毒を盛る者たちなのだ。……」²⁸（氷上英

廣氏訳) という主張に通ずるものがある。バイロンに対する評価は別にしても、樗牛がニーチェのいう「大地」に意義を見い出していたことは確かである。だが樗牛の「大地(樗牛の言葉でいえば地上)」に対する認識は、天上に対する地上、理想界に対するこの世界という程度のもので、「神は死んだ」という言葉でヨーロッパのニヒリズムの到来を告げるニーチェの「大地」とは、形而上学的な深さにおいても、その認識の背景においても、かなりの隔りがあるといわざるを得ないだろう。西尾幹二氏は、その著書「ニーチェ」(昭和五十二年五月二十五日、中央公論社)の中で、当時の日本のニーチェ理解に言及され、「ヨーロッパのニヒリズムの到来を告げる形而上学的意図は、第二次世界大戦の前夜までほとんど知られることはなかった。」と指摘されている。まだニーチェの存在すら恐らく知らなかった当時の樗牛である。認識の浅さや甘さは、致し方あるまい。だが二十才そこそこという樗牛の年齢と、当時の日本の文学界を考慮に入れるなら、その見識の深さには舌を巻くばかりである。「先生以上にエライ」²⁹といわれていたのも首肯ける。この一文に注目したのは坪内逍遙らの「早稲田文学」の編集部だけでは無論ない。当時一高在学中で、後に帝大の哲学科で樗牛と同級生となる桑木巖翼もその文章に感服した一人だった。桑木はこの筆者が、新聞記者か、キリスト教派の文学者ではなからうかと思っていたそうだが、翌年九月に、自分と同じ帝大の哲学科の同級生がその筆者だと知ってびっくりするのである。この「文学者の信仰」は、数多い樗牛の評論の中で、最初に光を放ったものということができよう。これ以外にも「山形日報」紙上における「羽陽文学」と自称する樗牛ら(樗牛の他に渡辺黙禪、畔柳芥舟、総崎鶴州らがいた)の活動は「早稲田文学」に注目されていた。そして樗牛はその中心的人物と目されていた。樗牛の文章のみというわけではないが、人間、靈魂、時間、空間、運命、理想、死生等の文字が頻出する評論や、欧米の名文の翻訳などに「早稲田文学」は注目してい

るのである。樗牛に多くの注目が集まっていたことは間違いない。なぜなら、前出の言葉は樗牛の文章にはよく出てくるし、ゲーテの「ウェルテル」を「准亭郎の悲哀」と題して英訳（樗牛の成績表から判断するに、独語に接したのは予科三年かららしい）からだが翻訳し「山形日報」に連載しているからである。なお樗牛の実弟斎藤信策によると、この頃樗牛が読破したものに、コレリッチ、ウォーズォース、シェレー（シェリーのことか）、バイロン、キーツ、テニゾン、ブラウニング等があったという。この中から現在高山家に所蔵されている樗牛の蔵書の中から確認できたのは、シェリー詩集と、ワーズワース詩集のみで、他は散逸してしまったものと思われる。

樗牛の二高時代の文学活動としては、他に卒業間際の明治二十六年七月五日に創刊号が発刊された「尚志会雑誌」と、井上安基、畔柳芥舟、藤原悲想庵、相良某等で刊行した同人雑誌「日本の花」³⁰が挙げられるだろう。前者には「近松戯曲に於ける女子の性格を論ず」を載せている。後者には時評を載せたようであるが、一号雑誌で終わっているとのことでもあり、また当の雑誌も所在が明らかでないので、どのようなことを書いたものか、残念ながら全く分らない。

明治二十六年七月八日、後の京大総長新城新蔵、後の蔵相井上準之助とともに「先生以上にエライ」といわれた樗牛は、二高を卒業した。この時樗牛はまだニーチェを知らない。ニーチェの思想に触れてもいないのだ。だが樗牛には既にニーチェに通ずるものが芽生えていた。最も早くは「春日芳草之夢」の中の「人生五十は素より蜚蜮旦夕の生涯、生の目的は快樂にあるのみ、後生万鈞の重名は生前一杯の酒に如かず」という言葉の中に、そして近くは「文学者の信仰」や「厭世論」に、そして樗牛の精神的な姿勢の中に。ニーチェは「人間的な、あまりに人間的な」の序で次のようにいう。「彼は満たされぬ食欲を抱いて残忍にうろつきまわる。彼に捕獲され

たものは彼の誇りの危険な緊張によって被害を受けざるをえない。彼は自分を刺戟するものを引き裂く。おおい隠されていて、何らかの羞恥感によって保護されているものを見つければ、悪意のある笑いをもってそれを反転させる。それらの事物をひっくり返せばどう見えるか、ためすのである。」

³¹ (浅井真男氏訳) 無論樗牛は当時ニーチェの「自由なる精神」など知りはない。ただ思ったことを齒に衣着せずに発言して慮らないだけなのだ。この後樗牛は様々なものを引き裂き、反転させる。どの様な大家に対しても筆が鈍るようなことは殆どない。それは樗牛が「信仰」を、即ち「自家立心の脚地」を持っていたからこそできたのだと、みるべきだろう。そして、そこにこそニーチェとの「先天の契合」があったと、私には思われる。それが一体何だったのか、今はまだ明ではない。いづれにせよ樗牛の精神は外に向って既にその歩みを開始した。そして大海へ、文化、文明の中心地東京へと旅立つのである。

注

¹長谷川義記 「樗牛——青春夢残 (高山林次郎評伝)」 暁書房 1982. 11

²斎藤野の人 「亡兄高山樗牛」 明治文学全集40 筑摩書房 昭和58. 10.

1

³小野寺凡 「人間高山樗牛」 評言と構想7～19 浅川書店 昭和51. 10. 30～昭和55. 10. 30

⁴評言と構想 (前出)

⁵秋山正香 「高山樗牛——その生涯と思想」 積文館 昭和32. 11. 10

⁶斎藤親平 「樗牛伝」 人文 大正5. 7.

⁷三浦菊太郎 「樗牛伝」 人文 大正5. 10.

⁸同上

⁹アレヴィー 「ニーチェ」 大野俊一訳 新潮社 昭和28. 11. 25

- ¹⁰ エリーザベト・フェルステル・ニーチェ 「若きニーチェ」 浅井真男訳
モダン日本社 昭和15. 4. 6
- ¹¹ 畔柳都太郎 「樗牛伝」 人文 大正7. 9
- ¹² 近野衛門治 「樗牛伝」 人文 大正6. 4
- ¹³ 中桐確太郎 「樗牛伝」 人文 大正6. 2
- ¹⁴ 評言と構想 (前出)
- ¹⁵ 「井上準之助伝」 井上準之助論叢編纂会編 昭和10. 4.
- ¹⁶ 評言と構想 (前出)
- ¹⁷ 長谷川義記 (前出)
- ¹⁸ 評言と構想 (前出)
- ¹⁹ 高山樗牛 「日本主義と世界主義」 博文館 明治41. 12. 5
- ²⁰ 評言と構想 (前出)
- ²¹ 中村光夫 「明治文学史」 筑摩書房 昭和60. 1. 20
- ²² 秋山正香 (前出)
- ²³ 評言と構想 (前出)
- ²⁴ Nietzsche "Dionysos-Dithyramben" Gruyter. Berlin. 1969.
- ²⁵ 評言と構想 (前出)
- ²⁶ 評言と構想 (前出)
- ²⁷ 土井晚翠 「学生時代の高山樗牛」 大雄閣 昭和9. 9.
- ²⁸ Nietzsche "Also sprach Zarathustra, Ein Buch für Alle und Keinen"
Gruyter. Berlin. 1968.
- ²⁹ 土井晚翠 「二高生ものがたり」 大雄閣 昭和9. 9.
- ³⁰ 評言と構想 (前出)
- ³¹ Nietzsche "Menschliches, Allzumenschliches. Ein Buch für freie
Geister." Gruyter. Berlin. 1967.

追記 鶴岡の高山家で樗牛が所有していた洋書類（半分は散逸してしまつたとのこと）を見せて頂いたが、それを私なりに整理してみたので、表にして掲載し、拙稿第一部の締めくくりとしたい。

書名	著者・编者・訳者	出版社
独 語		
1. 美術史概要 第I巻(全II巻)	ヴィルヘルム・リュブケ	エブナー & ゴイベルトウ シュトゥットウガルトウ 1892年
2. 倫理学	ヴィルヘルム・ヴントウ	フェルディナント・エッケ シュトゥットウガルトウ 1892年
3. 倫理学体系	フリートウリッヒ・パウゼン	ヴィルヘルム・ヘルシュ ベルリン、1889年
4. 歴史的基礎に立った 宗教哲学	オットー・プフライデラー	ライマー、1878年
5. ドイツの抒情詩	マキシミアン・ベルン	レクラム、ライプツィッヒ
6. アリストテレスのニ コマコス倫理学	J. H. V. キルヒマン	エーリッヒ・コシュニイ 1876年
7. 詩と散文	Dr. T. メットウナー	マイゼンハウス、1889年
8. インドの仏教美術	アルバート・グリュンヴェーデル	W. シュペーマン ベルリン、1893年
9. 現代の意志(美学)	Dr. マール・シュッツラー	テンプスキュー ライプツィッヒ、1886年
10. 美学	ローベルトウ・ブレールス	ヴェーバー ライプツィッヒ、1889年
11. オリュンポス山	A. H. ペティスクス	C. F. アメラング、1890年
12. 沈鐘	ゲルハルトウ・ハウプトマン	フィッシャー ベルリン、1898年
13. メシア	F. G. クロプシュトック	レクラム、ライプツィッヒ
14. ハンブルク戯曲論	レッシング	レクラム、ライプツィッヒ

書 名	著 者・編 者・訳 者	出 版 社
15. レッシングの賢者ナ ータン	クローノ・フィッシャー	T. G. ゴッタ シュトゥットウガルトゥ 1896年
16. ヘンリーク・イブセン 第 I 卷 (全 II 卷)	ロマン・ローエルナー	オスカー・ベック ミュンヒェン、1900年
17. シラー全集 1 ~ 12		レクラム、ライプツィヒ
18. ヘルダー全集 1 ~ 3	アドルフ・シュテルン	レクラム、ライプツィヒ
19. ジャン・パウル全集 1・3・5・7 (全八卷)		T. G. ゴッタ シュトゥットウガルトゥ
20. テオドル・ケルナー 全集 1・3 (全四卷)		リコラ、ベルリン、1879年
21. ゲーテ著作集 1 ~ 4		T. G. ゴッタ シュトゥットウガルトゥ
22. カント純粹理性批判	Dr. カール・レールバッハ	レクラム、ライプツィヒ
23. 文化史	F. F. ホーネッガー	ヴェーバー ライプツィヒ、1889年
24. Lehensfragen (レーエンスフラーゲン)	アウグストウ・シュペール	オスカー・ベック ミュンヒェン、1900年
25. Bunte Briefe aus Amerika (信策の蔵書と思われる)	オイゲン・ツァーベル	ゲオルグ・シュティルケ ベルリン、1905年
26. Hilfsbuch	ヘルマン・ランベック	レクラム、ライプツィヒ
27. サンスクリット語の初級 クラスのための入門書	ゲオルク・プラー	カール・コネーゲン ヴィーン、1883年
28. 英独・独英辞典	Dr. フリートウリッヒ・レ ーラー	レクラム、ライプツィヒ
29. ヴェーバーの独語辞典	マックス・モルトウケ	ベルンハルトウ・タウヒニス
30. 聖書 (旧・新)	Dr. マルティン・ルーター	T. G. ミュラー、1844年
31. 聖書 (旧・新)	(仏語)	アメリカ聖書協会 ニューヨーク、1894年

書名	著者・編者・訳者	出版社
32. 聖書(旧・新)	(英語)	アメリカ聖書協会 ニューヨーク、1868年
33. コーラン	(英語)	フレデリック・ワーン & Co. ロンドン & ニューヨーク
英 語		
34. 模倣芸術 その源泉と発達		ジョージ・ベルと息子たち ロンドン、1882年
35. アデリーンの芸術辞典		J. S. パートュー & Co. ロンドン、1891年
36. 美の哲学	ウィリアム・ナイトウ	ジョン・マレイ ロンドン、1891年
37. 楽器	カール・エンゲル	チャップマン & ハール
38. 現代画家 1・2・4・5巻	ジョン・ラスキン	ジョージ・アレン、1885年
39. 論理学体系	ジョン・シュトゥアート・ミ ル	ロングマンズ・グリーン & Co. ロンドン、1884年
40. 論理学	ウィリアム・ミント	ジョン・マレイ ロンドン、1895年
41. 思考法則概要		ロングマンズ・グリーン & Co. ロンドン、1867年
42. 道徳哲学のハンドブ ック	ヘンリー・カルダーウッドウ	マクミラン & Co. ロンドン、1879年
43. 現代画家 I 巻	オックスフォードの卒業者	United States Book Com- pany、ニューヨーク
44. 生理学的心理学概要	ジョージ・トランベル・ラッド	チャールス・スクリブナーの息 子、ニューヨーク、1892年
45. 心の生理学	ヘンリー・マウズリィ	D. アップルトン & Co. ニューヨーク、1883年

書 名	著 者・編 者・訳 者	出 版 社
46. 喜びは永遠に	ジョン・ラスキン	ジョージ・アレン、1889年
47. ホーマーのオデュッ セイ	アレキサンダー・ポウブ	フレデリック・ワーン & Co. ロンドン
48. 英文学研究II巻	ウィリアム・スウィントン	サンショウドウ、1890年
49. 文学の心地よさ	アイザク・ディズレイリ	フレデリック・ワーン & Co.
50. アレキサンダー・ポ ウブ詩集		ロンドン & ニューヨーク フレデリック・ワーン & Co. ロンドン
51. ベリー・バイシェ・シ ェリイー詩集		フレデリック・ワーン & Co. ロンドン
52. ロングフェロー詩集		フレデリック・ワーン & Co.
53. ワーズワース詩集		ロンドン
54. ヨーロッパの知的開 発の歴史1・2巻 (全二巻)	ジョン・ウィリアム・ドゥレ イパー	ハーバー & 兄弟 ニューヨーク、1876年
55. 教育の歴史 (国際教育シリーズ)	F. V. N. ペインター	D. アップルトン & Co. ニューヨーク、1896年
56. 自然主義者の図書館 32巻	サー・ウィリアム・ジャル ディン	ヘンリー G. ボーン ロンドン
57. キリストの模倣につ いて	トーマス・A・ケンピス	D. アップルトン & Co. ニューヨーク